

進化・宗教・国家

河野 有理

今回、大会委員会が注目したのは「進化」をめぐる思想の営みである。ダーウィンに端を発する進化論の近代日本におけるその受容については、研究史において全く無視されてきたというのではもちろんない。だがその扱いは、率直に言えば、ある種の「敵役」とどまってきたといっても過言ではないだろう。明治初年に花開いた啓蒙思想や天賦人權論を駆逐し、弱肉強食の生存競争を赤裸々に肯定する社会や政治のあり方を導く思想、「帝国日本」の思想的バックボーン等々。

だが近年の研究は、「進化論」の受容をめぐる思想的ドラマについて、より繊細で解像度の高い叙述を提供している。クリントン・ゴダール氏は『ダーウィン、仏教、神——近代日本の進化論と宗教』（二〇二〇年）において、すでに進化論を受容した上で展開されていた当時のキリスト教に対抗しつつ、近代仏教においても進化論との「抱擁」が試みられたという興味深い思想史的事実を明らかにされている。宗教Ⅱ反進化論という安易な等式は成立せず、進化論と融合した諸宗教の「生存競争」が繰り広げられていたのである。

進化論といえは弱肉強食という「社会的ダーウィニズム」。その日本における輸入総代理店として悪名高い加藤弘之についても近年の研究の刷新は著しい。田中友香理氏は『優勝劣敗』と明治国家（二〇一九年）にお

いて、先のキリスト者や仏教者はもちろんのこと、「平民主義者」から「国粹主義者」に至るまでこぞって進化論に立脚して自説を開陳する明治二十年代の思想界にあって、国家をも進化の法則に服する「有機体」と規定する加藤の政治思想のユニークな境位を明らかにする。問題は進化論者であることそれ自体ではなく、どのような種類の進化論者かということだったのである。

明治の思想が進化論一色に塗りつぶされるわけではもちろんない。明治初年の啓蒙思想や天賦人權論が想起されるとき、福澤諭吉と並んでもっとも頻繁に言及される中村正直。儒者として出発し、ミル『自由論』の翻訳『自由之理』、スマイルズ『セルフ・ヘルプ』の翻訳『西国立志編』の著者として名を高めたこの人物の思想には進化論の影はほとんど見えない。中村を、幕末における朱子学リバイバルの正統なる後継者と把握することで研究史に画期をもたらした李セボン氏は、その『自由』を求めた儒者——中村正直の理想と現実』(二〇二〇年)において、キリスト教的な神(上帝)や国家を丸ごと包摂する普遍的な「天」の思想を、同時代の「開化」の中に読み込もうとする彼の思想の特徴を描き出している。「開化」論における進化論の不在はそれ自体、興味深い思想史的問題であろう。

宗教や国家をめぐる、根本的な前提を異にする多様な見方や考え方が当時、ダイナミックにせめぎ合っていた。現代そして将来の政治や社会を考えるにあたっても役に立つ、「明治の思想」の面白さを体感していただくためには、このお三方の話をじっくりうかがうのがよいのではあるまいか。

(法政大学教授)